まなざし合いの帳

01 BACKGROUND －大阪府 大阪市 東横堀川－

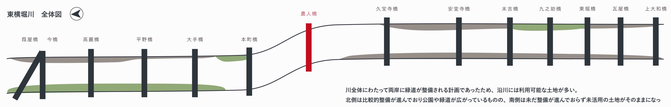
■変化する川とまち

大阪城の築城に伴って開削されて以降、4 世紀以上の時を刻んできた市内最古の堀川、東横堀川。
城とまちの境界であるこの堀川には町人によって多くの橋が架けられ、水辺は都市の重要なオープンスペースとして「水の都大阪」の発展を支えてきた。陸上交通の発展と水運の衰退、高速道路の建設などとまちの形態が大きく変化する中で、豊かな水辺は失われ、しだいにまちは水辺に背を向けるようになっていった。

2001 年からは大阪府市をあげて水都大阪の取り組みが始まり、東横堀川は活動の中心となる「水の回廊」の一部として再び水辺の活用が検討されている。地域団体による活動や護岸の改修が進められる一方、川全体での活用にはまだまだ時間を要するのが現状である。

■見えない川

東横堀川はその大部分を高速道路に覆われた「地図に載らない川」であり、市内の人でもその存在を知らない人も少なくない。
川の両岸には活用可能な土地があるものの、行政手続きやの煩雑さや高架下であるという背景から未活用のケースも多く、特に南部では立ち入りすらままならない場所がほとんどである。
また、水深が深く日光が当たりづらいため水面は暗く、過去の汚染の経緯からも汚い川であるというイメージが根強く残る地域でもある。現在は水門の調整によって水質が大幅に改善され、失われた生態系も徐々に戻り始めている。



■交わるエッジ

現在の東横堀川周辺地域は、この堀川を境に連合長会が分布しており、この用はどの地域にとってもエッジとなる部分である。また、中央大通は大阪のコミュニティを南北に分断する境界となっている。

対象敷地は、この2つのエッジが交差する農人橋付近とした。

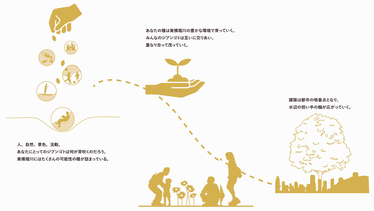
■なびく染布

南北にまっすぐ伸びる東横堀川の中で、農人橋とその北に位置する本町橋の間は唯一川筋が曲がっており、「本町の曲がり」と呼ばれた。
昭和の初期までこの地の両岸には捺染工場が立ち並び、川でゆすがれた染布が風になびく光景が初夏の水都を彩った。

02 CONCEPT －ジブンゴトとして川を見つめる－

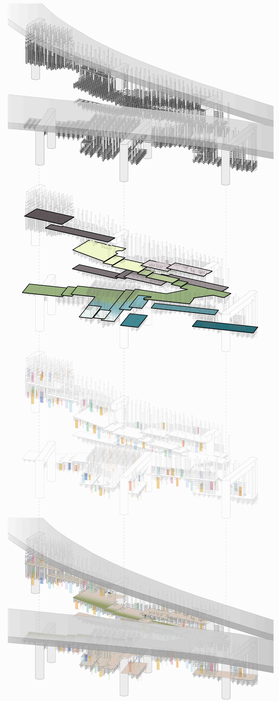
新しく開かれた水辺も維持されなければ意味がない。しかし、全長約 2.5km に及ぶこの川を行政が維持するには限界がある。では、新たな水辺の担い手は誰なのか。町人が育んできた大阪のまちにそのヒントがあると考える。
開削以来、東横堀川は都市の公共空間でありながらも、橋の架かる通に住む町人たちの手によって日常の手入れがなされていた。橋や川の存在が暮らしや生業にかかわる、「ジブンゴト」であったのだ。
時が過ぎ、河川や橋の管理を行政が行う現代で、かつてのように都市の水辺を「ジブンゴト」として感じる人はどれほどいるのだろう。
「ジブンゴト」を再び芽吹かせるには、まずこの川を見つめるところから。

川や界隈を感じる、私のため、あなたのため、誰かのための居場所を下ろし耕すことで、
「ジブンゴト」の芽が育ち、水辺を思い、担う人の輪が育っていく。



03 DIAGRAM －都市における居場所のつくりかた－

■形態操作



1. 柱をおろす

東横堀川は高架に覆われた川である。
この川特有の地域資源である高速道路を活用し、新たな親水空間の設計手法を提案する。

高速道路を地盤とし、柱をおろす。
おろした柱が広い都市空間に区画を与える。
この区画を基準に滞在空間が形成されていく。

異なる高さの柱が水辺を緩やかに切り取り、
水辺にも人の活動が広がっていく。
柱をおろすことで足元に空間が生まれ、
水辺は変わることなく連続し続ける。

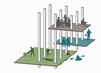
現場は 3×3m を基準とし、縦・横のグリッドは 15×15m とした。
「プロトタイプ建築」と言葉にするための最小単位の空間である。
縦・横グリッドは 1 人のスケールに対応しており、空間を切り分ける
ことで自分の領域を確保することができる。

おろされた柱が広い都市空間を小分の様くサイズに区画する。
それぞれの領域は対等関係となって接しれ、距離感になっていく。
水辺もまた、柱の高さによって緩やかに分けられていく。
柱の下では水辺の連続性を自由さは確保される。

2. フロアを配置する

施設の核となる農園は通路を兼ねて配置される。西は都市と農園、東は水辺と農園をつなぐ軸であり、農園のそばには様々な機能を持つ滞在空間を設ける。

農園は高架によって囲まれた閉ーしょりです。
西は都市に向かって、東は水辺へ思いがあり、それぞれは農園を中間領域として接続される。
この時で、また、まちの活動を育てる上場となり、周辺をフィールド同士の交流が生まれていくことに期待する。



通る、眺める、憩く。
私 1 人で、あなたやみんなと。
柱間者の活動がフロアから溢れ、しだいに農園に染み出していく。

3. 帳をおろす

都市の中に自分の領域を切り取るための帳をおろす。

これはコミュニティ同士を分ける仕切りでもあり、
自分と外の緩衝地帯なのかもしれない。

見えるようで見えすぎない。

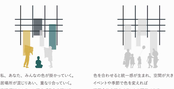
様々な滞在や利用者に寄り添い、変化を受け入れる
空間操作が都市の居場所には必要なのだ。

帳の長さは内外のつながりを示唆している。
長くおろせば高さが広がっており、帳を重ねて角を閉める。
短い帳は高都の場を形成しつつ、都市に開く。
帳を操作し、それぞれにの 3 種よって居場所が決定される。

帳をおろせばあの空間になる。
私とあなたの間で 2 人の空間になる。
それぞれの帳は重ド重まって、やがてみんなの空間を形成する。

4. 彩る

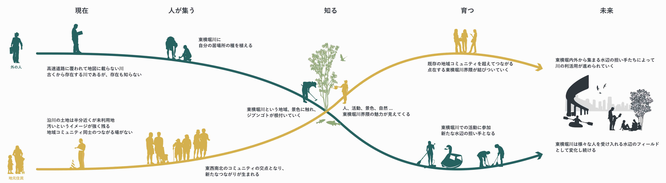
帳は居場所の種である。
人がとどまると、しだいに
色が付き、
集まり、
重なり合って居場所は育まれていく。
都市に表現されたみんなの居場所が、
東横堀川の情景として都市や水辺を彩る。



私、あなた、みんなの色が混ざっていく。
距離感が近づき、重なり合っていく。
東横堀川のカラー一辺倒んず変化を続ける。

色を合わせる前一般的まれ、空間が決まっていく。
イベントや事業で色を重ねれば
調和全体を決定することも可能である。

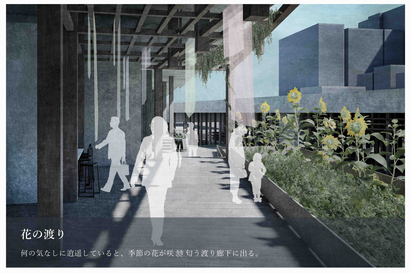
■人と東横堀川のつながり方



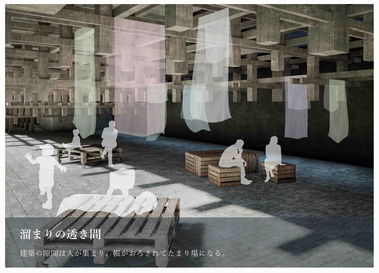
農園が都市に行き交う人々を吸着し、東横堀川へといざなう。川辺で過ごすうちにこの地が自分の生活や活動の一部となり根を張っていく。人が集えば新たに人がやってくるだろう。一度はまちの裏側になった東横堀川が、都市の自由なフィールドとして再生されていく。

04 SCENE －居場所が彩る都市の風景－

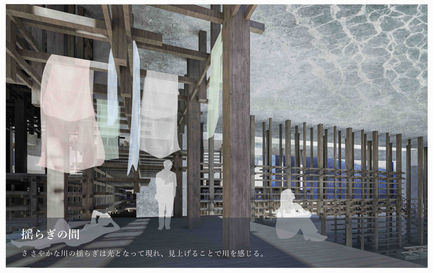
書架 / 眺めの縁
居場所の帳が幾重にも重なり合う。私の場所からふと外を眺めると新しい東横堀が見えてくる。



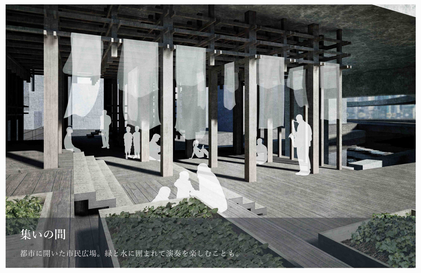
花の渡り
何の気なしに通過していると、季節の花が咲誇 匂う渡り廊下に出る。



溜まりの透き間
建築の印刷は人が集まり、帳がおろされてたまり場になる。



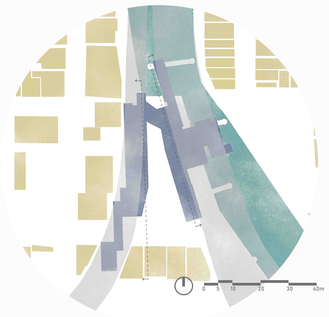
揺らぎの間
ささやかな川の揺らぎは光となって現れ、見上げることで川を感じる。

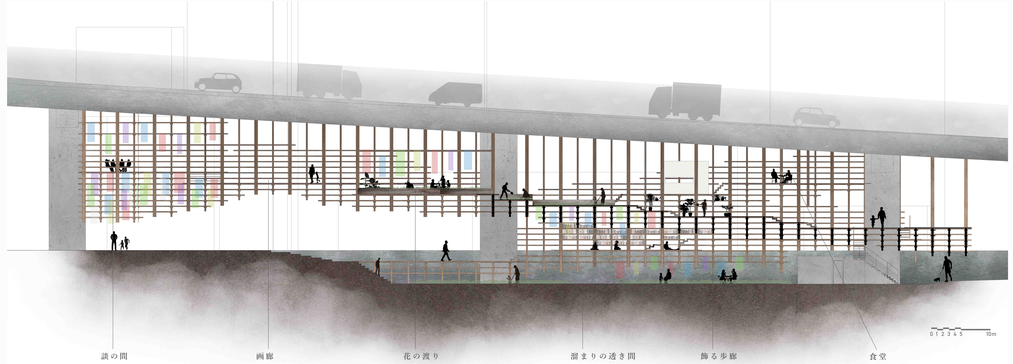


集いの間
都市に開いた市民広場。緑と水に囲まれて談義を楽しむことも。

渡し場
釣りやサップなど多様な水辺の活動が広がる、水面の玄関口。

05 PLAN －居場所の集積－





談の間
通りからは利用者の様子が見える多目的スペース。
用途に応じて、帳をおろして空間を調節できる。

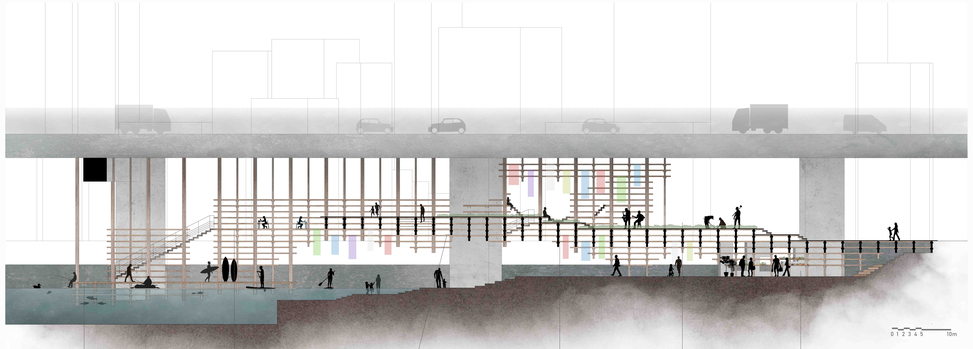
画廊
地域の人の作品や活動の様子が飾られるギャラリー。

花の渡り
利用者によって様々な人たちの地域の花壇。
咲き匂う花々が季節を知らせてくれる。
自分が帳を広げればいつも違った見えかたしれない。

溜まりの透き間
農園に近い憩いのテラス。
自分の帳をおろして見に来る場所。

飾る歩廊
建築の構造が剥き出しになり、アクセントポットとして飾られる。
みんなの作る陶ったた花や植物が、廊下を飾っていく。

食堂
都市の自然を眺めながら食事を楽しめるレストラン。
メニューには農園で収穫された食材が提供される。



渡し場
水辺の活動の中心地。
ヨットや釣り、ボートなどが集まれる。
水面を使う人たちが集合し、川の生き物たちの住処になっていく。

学びの廊
農園と水辺をつなぐ廊下には、物販や仕事のスペースを設ける。
帳をおろせば自分の領域をもち、水面を眺めながら自分の時間を過ごす。

揺らぎの間
川の水面に反射した光は、高架の下を輝かせる。
風のゆらぎ・重畳帳同の揺らめき、見上げることで感じてもらう。

集いの間
緑と水に囲まれた広場空間。
芝生やイベントなど現地の楽しい空間要さん。
利用のルールは広げて、帳の表を中心が発生する。

農園
農園によってそれぞれの空間が接続される。
浮灯者と利用者が入り交じり、新たな出会いの場。
テラアクエスやルシャ中間エッセンシャが展開される。

木の洞
木組みと敷をかけた広場空間を利用して利用する。農園や地域と
テラアクエスやルシャ中間エッセンシャが展開される。